

寛永諸家譜

安倍氏  
二卷之内

147

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(147)	
函號	特	76	1









河部

志

岩

志

采山

山

寛永法家系傳

安倍あへのや

河部あへ

心勝しんしょう

若尾わご

伊豫いよ

後ご

中ちゆう

心しん

東照大権現とうしょうだいこんげん

淺草文庫



竹久氏君と号し一書しくまのり  
天文の末

大指現るをいさぐ出幼少りて後列  
今河義元の館は海にありて時正勝  
佐守して至重は人平くまのり

義元掌

大指現る一あく一徳樂と云ん  
事とのまじ正勝

大指現る一長せる事一蔵なる

明る以て一清石代と云る

是とつとむこれより後冬列

遠列後列系約江戸依ん大坂木の

るを經歷一つ人平くまのり

重なることす可く乃戰場

佐守して思過見と逢くあつて

地ふ子石と云るより一後み佐下

伊豫守と云る

長入年四月吉指列大坂











目十の〇大坂陣の陣に次郎の佐士

とていひくはしむ

え和えし大坂陣の陣に次郎の佐士

とていひくはしむ

下野軍の陣に次郎の佐士

地とくはしむ

はしむ

目三の〇八石の地とくはしむ

とていひくはしむ

とていひくはしむ

目六の〇大坂陣の陣に次郎の佐士

原乃城よりつる二石の地とくはしむ

地とくはしむ

名酒院殿をよむ

將軍家清と清の母は小田原の陣に

後清あり

目九の〇小田原をあらうあ武列を築れ

城を治りし又石れ地とくはしむ







孫正合よりあるを傳之万石乃  
軍役よりいへく大坂乃傳書哉  
川とむ

忠告

後五位下 左馬助  
を列横須賀の傳生入須賀  
五郎左衛門康高常より仔細書  
正勝よりいへく正勝よりいへく徳

事と

大將現へ言ともしつらゆへは正勝が  
徳子の内と康高が皆と  
是と横須賀より正人とこふ

大將現津評容あつてはるら  
忠告と横須賀へはつらつら付

天正十四年より

同十八多小田原陣乃忠告  
横須賀乃忠告同く内匂乃







東

明氏と加へる白りりもへる五子衣  
の地を所と且後五位下り  
叙一太書政とあり依見の位  
當及び大坂の陣もとりと  
寛永えきり一平とて歳五十二

地右郎 早世

女子

も居衣見ちが妻

忠秋

若後ち 後日佐下

母を大須領五所ある年乃康言

か女

若長十五才九歳小

將軍家一一人とてまゐる



同十九日二十人の月傳と  
元和之三子金銀三百俵と  
しり涉膳番と  
同九年武列吉村より  
子石乃北と一重と  
葛原と

同年

將軍家にて清上  
將軍宣下のりあり  
將軍宣下のりあり

去々々徳兵衛の珠り  
徳兵衛の珠り

徳兵衛の珠り  
徳兵衛の珠り

寛永元々多又忠志  
寛永元々多又忠志

同三年と列新田  
同三年と列新田

の地をくく  
の地をくく

一石をくく  
一石をくく

同多 徳兵衛より  
同多 徳兵衛より

伊豆守信経と  
伊豆守信経と



清小姓頭とあり

目六子武列安保とあり

上列白井とあり

と加信とあり

清小姓頭

同十子正月廿日

將軍家清忠

清佛殿へ

うてつり

弓乃法よけと是とあり

同子世秋松平伊豆守信經坊田

加賀守正盛三浦忠摩守正次右田

海守中書實宗初對馬守重次と

同く職役とあり

一けらとあり

同子

將軍家清忠



長五郎下り叙

同十二冬四郎と將トて野列

壬午乃陣越す白う一萬九百石

餘の地をくく入られまへく二百

五子石を以て

同年十月廿九日忠秋伊豆守信經

加納守正重と同く大井大旗以

利勝河井讚波守忠勝の列り

相くりて連署奉書判を

くし清守恩の玉なり

同十二冬四月

將軍家日光清康福よ供を以て

今の時

將軍家清康常小く此社あり

付り 給ふらてりりし

乃染くらうて清福をらの法よ

しつゝこを引くまじら

還清の時壬午の母よ清一宮あり



て高木貞宗の清服指すといふ  
黄令清服うくといふとす  
明く士林の名家の清服物  
とす

同十二月朔の信使  
内り叔父の礼曹書官を  
去を贈因て其籍及び喜物  
を

同十六日正月者云々

武列忠の城とす  
子石と加信一  
信

同二十日の秋朔  
又礼曹参判書  
及び喜物とす

某

山之部



女子

永井太左衛門文忠かつかうえのたみ 忠勝ちかたけ 妻

正与

若菜清

河内守

後五郎下

生田之河

尾張大納言義忠おわりおのり 子

寛永十七年三月廿二日尾列ひらう

衣古屋ひこや 病死ひやうし 歳六十八

正致

若菜清

河内守

尾列清例おわりせいれい 子

母若菜清母はは 女むすめ

女子

石川市正いしかわしちまさ 妻

女子

澁川長しぶがわなが 子こ



女子

山村甚三郎の妻

女子

子村平太馬の妻

正岡

積八郎 甚三郎

尾川清洲の妻

政池

長九郎 修理亮

後五郎下 生女

武蔵江戸

寛永五年八月甲子武列江戸

とひく平と成之十六 法名江全

女子

馬場人妻

正合

酒子代 市正

母が友肥後子法正の女



重次

山城守 尉馬守 生玉武藏江戶

一ツの母方の伯父之浦監物

重成が養子となりて三子石の氏

と彫りて幼少より

右徳院殿一ツ人々々々々々々々々々

と打ちり後五條下り一叙一

之浦山城守と号し且て後養父

重成実子を生らるり少くも重次

本氏より何れ乃稱号と用ゆ

え和え多清小姓の跡とあり

寛永九年より

將軍家よりは人々々々々々々々々々

日々々々々々々々々々々々々々々々

りらひらら

同十年三月廿二日清を名とあり

勅使すべしとのち 信出され尉馬守

と号し



同十二多八月九日下野國麻波  
の内一とていへ別一萬石の  
地を御下りのら岩築城  
とありへまの旨 仰つけられ  
五萬八千石と御下りて  
將軍目光へ渡すの旨を御次  
のへより御下りて御下りの  
築城し入すあり  
同十五多十一月吉 仰よらる

松平信長書信總阿部を後忠秋と  
仰く奉書し判とく人  
命の承とね  
同十六多正月朔日 御命よらる  
後田信下り叙ら恩賞のあり  
事あげらるる  
同十九多四月日光山に石廟建立  
供養あり十五多  
將軍家清光山に朱印少く社



四ヶ月 重次 信を奉りて候  
随分の安と有り 以候と云ふ候

一ヶ月 是と引く候

回サ多乃 秋胡 鮮玉の信使 且

の内 及 國の 礼曹 冬 判書 物 事

去 宣と 重次 信り 候

物と 喜物と つら

女子

内友 早 あり 妻

女子

成 淑 伴 氏 あり 妻

盛次

甚 之 所

女子

安 友 伊 頼 あり 妻

千膳

武 列 江 戸 あり 妻



長松 ちやうまつり

母 はは 長松 ちやうまつり の 少 すくなく 子 こ 定 さだ 勝 かつ 女 むすめ

白 しろ 圓 まる 同 どう 女 むすめ

女子

松平 まつらへい 隠 かく 岐 ぎ 中 なかつ 定 さだ 約 やく 養 やしやう 子 こ 松 まつ 平 へい 子 こ 助 すけ 太 た 政 まさ

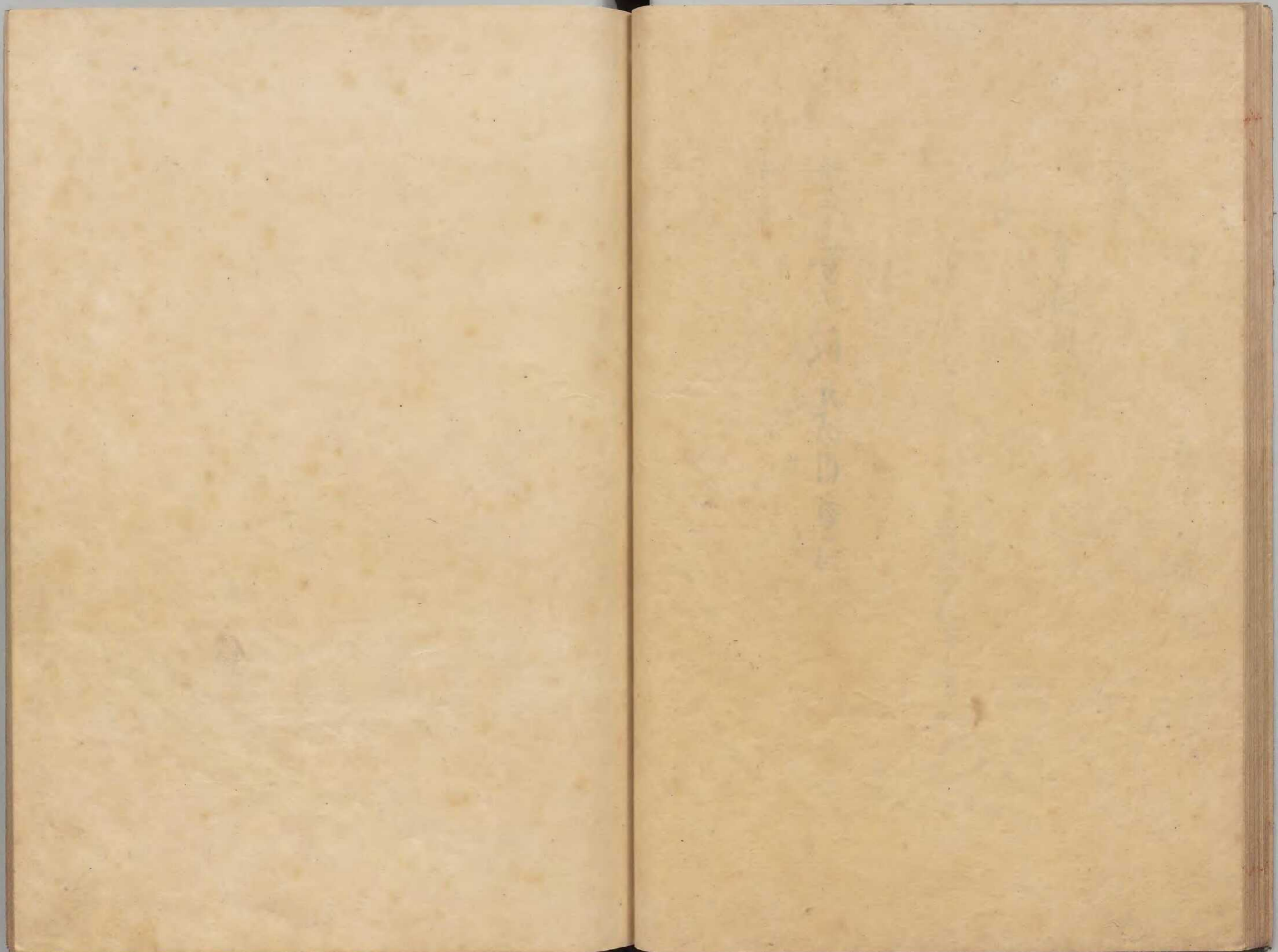
が 妻 つま

女子

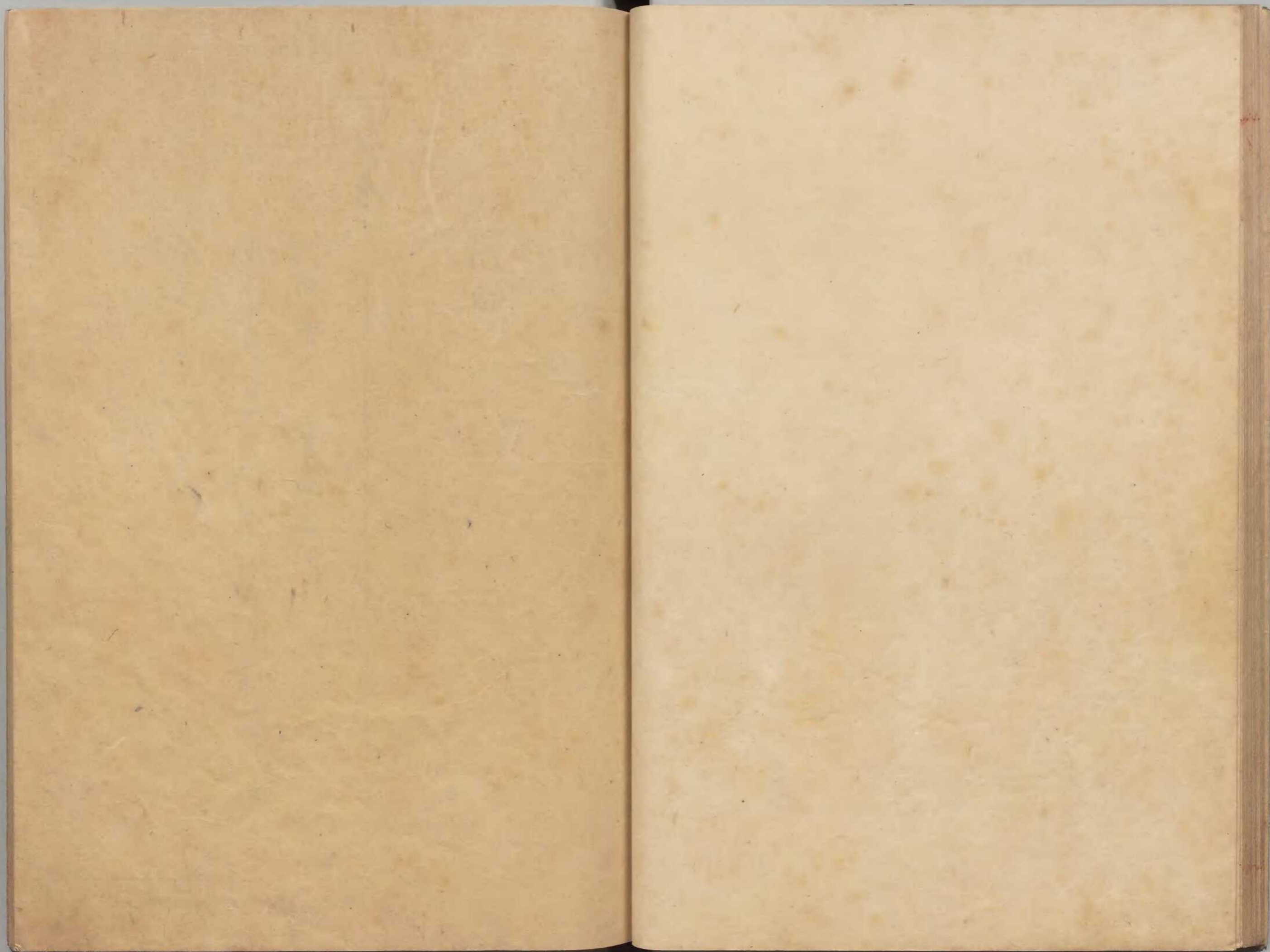
女子

家 いへ の 紋 もん 丸 まる の 口 くち 字 じ 女 むすめ











● 東

阿<sup>あ</sup>勃<sup>へ</sup>

新<sup>しん</sup>羅<sup>ら</sup>所<sup>しよ</sup>

生<sup>せい</sup>國<sup>こく</sup>之<sup>の</sup>河<sup>か</sup>

清<sup>せい</sup>原<sup>げん</sup>君<sup>くん</sup>

よつ久<sup>く</sup>く

戰<sup>せん</sup>場<sup>ば</sup>よ

とら<sup>とら</sup>く<sup>く</sup>討<sup>たう</sup>死<sup>し</sup>



重当

新田部

生國同前

法原君

廣忠のよつ人いんとくまら

天文七年

廣忠の之列と持のし

政治せいぎと記し重当しげあき戦死いくさと之十八年じゅうはちねん

重吉

新田部

生國同前

天文九年てんぶんくわねんよりより

廣忠ひろちゆうのよつ人いんとくまらとくまら

十一歳

同十一歳

大持現おほもちのあらはれ以証しるしあり 廣忠ひろちゆうの命いのちよ

大持現おほもちのあらはれよほくほくとくまらとくまらと清沙しよさ小姓こしやうの

〜めらりりりりり

大持現おほもちのあらはれ清沙しよさ幼少こどものこゝろに後列ごれつ今川いまがわ義元よしかず



の彼<sup>ら</sup>より仰<sup>ま</sup>す内<sup>に</sup>何<sup>れ</sup>の<sup>人</sup>か  
敬<sup>ん</sup>して之<sup>れ</sup>列<sup>し</sup>て仰<sup>ま</sup>り  
まづるものは酒井<sup>の</sup>報<sup>を</sup>以<sup>て</sup>平定<sup>す</sup>を  
同<sup>じ</sup>友<sup>ら</sup>に告<sup>げ</sup>て其<sup>の</sup>意<sup>を</sup>告<sup>げ</sup>る所<sup>に</sup>日<sup>に</sup>新<sup>し</sup>し  
重<sup>重</sup>を等<sup>し</sup>なりとのら

右<sup>に</sup>徳<sup>院</sup>殿<sup>より</sup>つるま

享<sup>徳</sup>十六年<sup>正月</sup>十九日<sup>に</sup>死<sup>す</sup>  
八十二歳

重<sup>重</sup>次<sup>次</sup>

新<sup>元</sup>右<sup>右</sup>馬<sup>馬</sup> 生<sup>生</sup>國<sup>國</sup>を<sup>を</sup>江<sup>江</sup>濱<sup>濱</sup>松<sup>松</sup>

十<sup>十</sup>四<sup>四</sup>歳<sup>歳</sup>少<sup>少</sup>く

大<sup>大</sup>持<sup>持</sup>現<sup>現</sup>よりつるま

右<sup>右</sup>徳<sup>徳</sup>院<sup>院</sup>殿<sup>より</sup>つるま

将<sup>将</sup>軍<sup>軍</sup>殿<sup>より</sup>つるま

年<sup>年</sup>次<sup>次</sup>

享<sup>享</sup>徳<sup>徳</sup>十<sup>十</sup>年<sup>年</sup> 生<sup>生</sup>國<sup>國</sup>武<sup>武</sup>藏<sup>藏</sup>



台漣院殿よりしんすくまらる

来

才十郎

寛永永え多より

將軍彭よりしんすくまらる

守勝

新四郎

生國武藏江戸

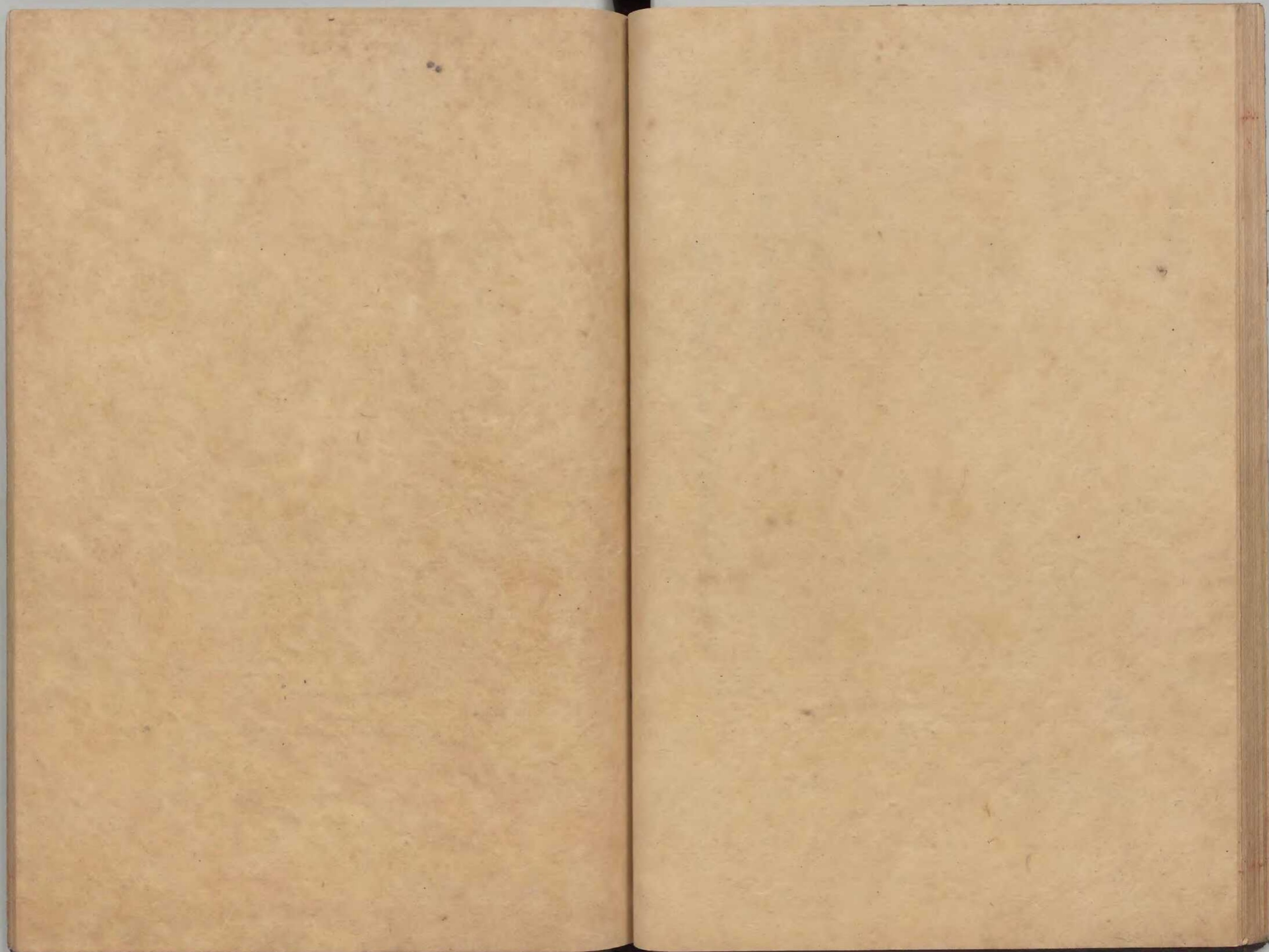
元和七年十月某少く

台漣院殿よりしんすくまらる

將軍彭よりしんすくまらる

家の紋 丸の目 尾二枚







阿<sup>あ</sup>部<sup>べ</sup>

● 貞友<sup>まこととも</sup>

与<sup>よ</sup>実<sup>まこと</sup>友<sup>とも</sup>厨<sup>くりや</sup>

生<sup>なま</sup>國<sup>くに</sup>之<sup>の</sup>河<sup>がは</sup>

大<sup>おほ</sup>檢<sup>けん</sup>現<sup>げん</sup>之<sup>の</sup>川<sup>がは</sup>人<sup>ひと</sup>平<sup>へい</sup>之<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>病<sup>びやう</sup>死<sup>し</sup>

三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>六<sup>ろく</sup>年<sup>ねん</sup>



貞後 まご

久五郎 くごろう 生國 なまくに 後河

名徳院殿とよむ

將軍家よりつくとくまらる

家乃紋 丸の内より海尾二枚 うみのお



阿部

● 某

板倉花人

三列長瀬之

宗吉

板倉助大進



いらい  
廣忠卿より人々をまゝにまゝに  
是様  
をありける

宗正

板倉助左衛門

廣忠卿より

大杉現より人々をまゝにまゝに  
是様哉

あつる

天正十年より病死

正勝

阿部重次

正勝は阿部重次は重次が姓少く  
婿と

より故より氏を阿部より  
とむ

大杉現より人々をまゝにまゝに  
是様哉

平よりより續て

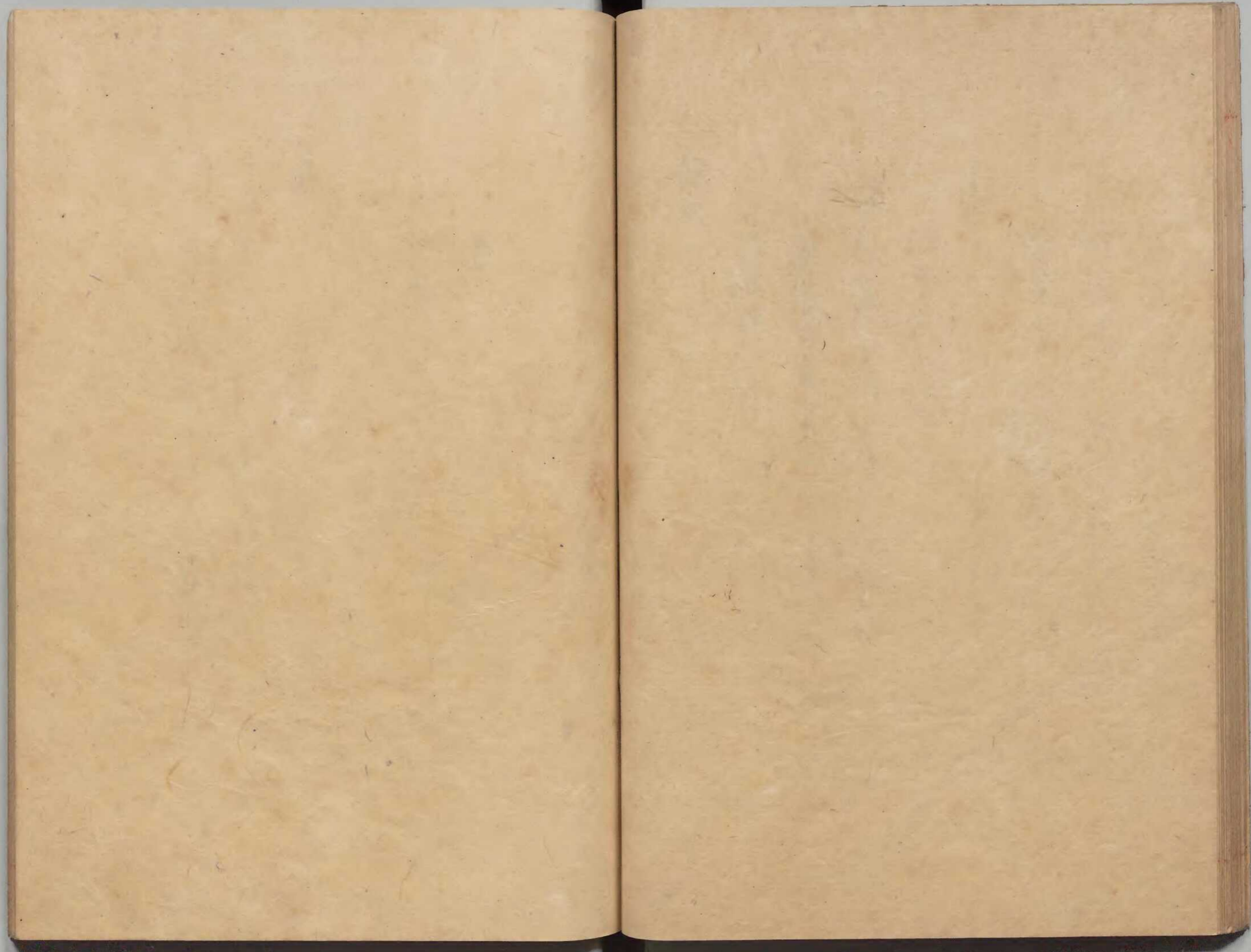
名徳院殿及

將軍家より人々をまゝにまゝに











● 来

貴志きし

君とあひきみとあひ

豊後ぶんご

牛久保うし久保

大石道長おおいし ちみちなが 一人ひとり 与方よとむか 同心どうしん とあひ

ら



正成

兵部 生國武藏

小糸氏照より武列より

阿知免村野島村栗本村五松の庄を

承

長八より六月より死より

六十四

正久

御来 生國同前

天正十八年開東山入國の時

大権現より御賜より

長元年 御命を

法より武列法戸より

必地より

同十八年九月より四十六歳より

病死



正書

孫長末

生國同前

開東津入國の時

大持現より得まきまきくまらう大書

をほとむ相列津まきまき久井くわよりい

此地まきまきを給まきまきり并まきまきに切末まきまきより

長十五多九月まきまきの百四十一歳より

て死まきまきり

正書

孫長末 生國同前

父の遺跡まきまきよりい

大持現よりいまきまきくまらう大書をい

とむ

名徳院殿よりいまきまきくまらう

元和四年九月まきまきの十八歳よりい

病まきまき死まきまき嗣子まきまきなりいまきまきくまらう此地まきまき并まきまき



山切まよりあけらる

正勝 まさら

赤松 中園同前

元和九年

將軍家より信人まことより下持國

幼嘆郡つげの国より信人より信地しんちより

信人より山切まより信人より信地

東邊あづまの役やくより信人

政尚 まさたか

八海老やま 中園同前

元和九年

白徳院殿より信人より信人より信地しんちの送跡おくりあと

信人より信地より信人より信地

寛永十年

將軍家より信地より信人より



家の紋丸の口下漿酸草



岸

正吉

日房

牛久保

小糸隆興

めい

大権現

白蓮院殿



正久

日高丸

牛國仔

右徳院殿とよむ

將軍家よつとく

家の紋

友丸







予久小... 園東

新良

五右衛門一説... 新義

井殿

目録

貞任

厨河二郎吉丈

康平五年九月十日吉源新義乃

...

宗任

鳥海三郎

筑紫... 放流...

官照

小松鍛境海師



正任 まさよし

王沢庵五郎 くみさくしんご

重任 しげよし

小松鍛二郎 こまつかじ

喜波王沢庵五郎正任きな子まさよし

重秀 しげひで

小松小左郎

武任 ぶぢん

小松二郎 友原泰衡ともはらの やすひらと同義どうぎを討死

武重 ぶぢゆう

小松左郎

重良 しげら

岩手左郎 いわて

重助 しげすけ

小松五郎

助頼 すけたか

塩奥六郎 しほの



定助 さだすけ

小松五郎

定頼 さだより

四郎左衛門 八幡 やまひら 付 つ

来

長井二郎 ながい

元範 もとのり

小松五郎 こまつ

元經 もとつとむ

左衛門

元經 もとつとむ

小松又右衛門

重信 むねのぶ

小松五郎 こまつ

信長 のぶなが

小松五郎 好孝 このたか 後 のち 改め あらため 入道 にんどう 一 いち



寒く園と号す  
永正十六年討死

重長

小松左助

伴左膳宗之属

天文十八年八月十五日討死

法名廓念

重光

小松源理亮

晴宗をくびろの子輝宗に属す

其母中將新田小松等輝宗少将

くらりて合戦しとぶる

既しとる小松鍛冶に退る

こころを以て途小とひく新田

とて愛し輝宗に降参す



重久

中野小松殿しんやこまつのりよりこれよりこれより  
中野ハなかの越列こしりよりより長尾ながお通信とんしんより  
属しゆより重光しげみつよりより城しろをを因よりて  
ちり輝宗てるひさいりりより共とも士しと率りつ一  
重光しげみつとせむ重光しげみつ防まもり利りありす  
てはわたり自みづか家いより時ときより永祿えいりく六年  
十一月じゅういちがつ乃すなはちなり 法名ほふな圓心えんしん通觀とんくわん

小松重助こまつしげすけ 故むかし是こゝは次つぎ次つぎをを尉ゑいと改かへむ  
牛園うしづのおね

重久しげひさ九こゝろ年としのより是こゝは父ちちよりよりいいははああ  
僕わが頃ころ等ら重久しげひさととりてて小松こまつ氏のし墳ふん墓ぼ  
妙心院めうしんいんにに入い叔父しやくふのの信順しんじゆん的てき報ほう及およびび  
法衣ほふえよりよりいいははああ  
歌うた回まわりりいいははああ

一旦いちだん剃髮ていぱつ一いちはは要よ少せうするすてて順色じゆんしき  
いいははああ



号<sup>いけい</sup>も<sup>い</sup>重久<sup>しげひさ</sup>幼少<sup>わらわ</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>孤<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>あり

りの父<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>知<sup>し</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>あり

して父<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>雛<sup>ひな</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>あり

を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>—<sup>—</sup>小<sup>こ</sup>松<sup>まつ</sup>五<sup>ご</sup>助<sup>すけ</sup>と<sup>と</sup>ふ<sup>ふ</sup>丁<sup>てい</sup>を<sup>を</sup>り

さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>二<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>松<sup>まつ</sup>の<sup>の</sup>城<sup>じやう</sup>を<sup>を</sup>昌<sup>まさ</sup>山<sup>やま</sup>義<sup>ぎ</sup>次<sup>じ</sup>り

属<sup>ぞく</sup>す

天<sup>てん</sup>正<sup>せい</sup>十<sup>じゅう</sup>二<sup>に</sup>と<sup>と</sup>多<sup>た</sup>十<sup>じゅう</sup>月<sup>げつ</sup>輝<sup>き</sup>宗<sup>そう</sup>義<sup>ぎ</sup>次<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>小<sup>こ</sup>浜<sup>はま</sup>

の<sup>の</sup>城<sup>じやう</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>會<sup>かい</sup>盟<sup>めい</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>以<sup>い</sup>重<sup>じゆう</sup>久<sup>きう</sup>

と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>身<sup>み</sup>と<sup>と</sup>愛<sup>あい</sup>—<sup>—</sup>奴<sup>ぬ</sup>僕<sup>ぼく</sup>の<sup>の</sup>取<sup>と</sup>り

かり<sup>かり</sup>義<sup>ぎ</sup>次<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>盟<sup>めい</sup>取<sup>と</sup>り

義<sup>ぎ</sup>次<sup>じ</sup>輝<sup>き</sup>宗<sup>そう</sup>を<sup>を</sup>生<sup>せい</sup>捕<sup>ぼ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>あり

三<sup>さん</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>正<sup>せい</sup>宗<sup>そう</sup>競<sup>けい</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>あり

—<sup>—</sup>義<sup>ぎ</sup>次<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>付<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>付<sup>つ</sup>重<sup>じゆう</sup>久<sup>きう</sup>祇<sup>ぎ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>あり

あり<sup>あり</sup>義<sup>ぎ</sup>次<sup>じ</sup>が<sup>が</sup>子<sup>こ</sup>幼<sup>わらわ</sup>少<sup>せう</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>佐<sup>さ</sup>竹<sup>たけ</sup>

—<sup>—</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>重<sup>じゆう</sup>久<sup>きう</sup>浪<sup>なみ</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>會<sup>かい</sup>津<sup>つ</sup>

よ<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>會<sup>かい</sup>津<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>城<sup>じやう</sup>を<sup>を</sup>道<sup>みち</sup>名<sup>な</sup>盛<sup>せい</sup>重<sup>じゆう</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>あり

影<sup>かげ</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>あり

同<sup>どう</sup>十<sup>じゅう</sup>五<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>六<sup>ろく</sup>月<sup>げつ</sup>正<sup>せい</sup>宗<sup>そう</sup>盛<sup>せい</sup>重<sup>じゆう</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>あり



とひく合戦のそはき久光降下  
進く鉄炮太の肩よりあらし盛重  
はかり一敗少して依行義宣乃  
死よおしりくろくろく久光東よ  
到り

同十九年

東照大権現と稱し武列節概  
の月よといく此とすゆよ  
久保元子初獲倉内陣と終身  
文禄元子初獲倉内陣と終身

考長五子同ヶ原山陣より  
考長五子同ヶ原山陣より

同十九年大坂冬山陣と終身  
同十九年大坂冬山陣と終身

元和四年正月廿日六十四日  
死し法名萬徳休羅

定章

黒澤長六郎  
生田大和  
後事助少くあらしむ







定事より列録楚那の由より  
形知とくもくもく  
日にも清島とある

重治

十世末 生國隆興

寛永十一年

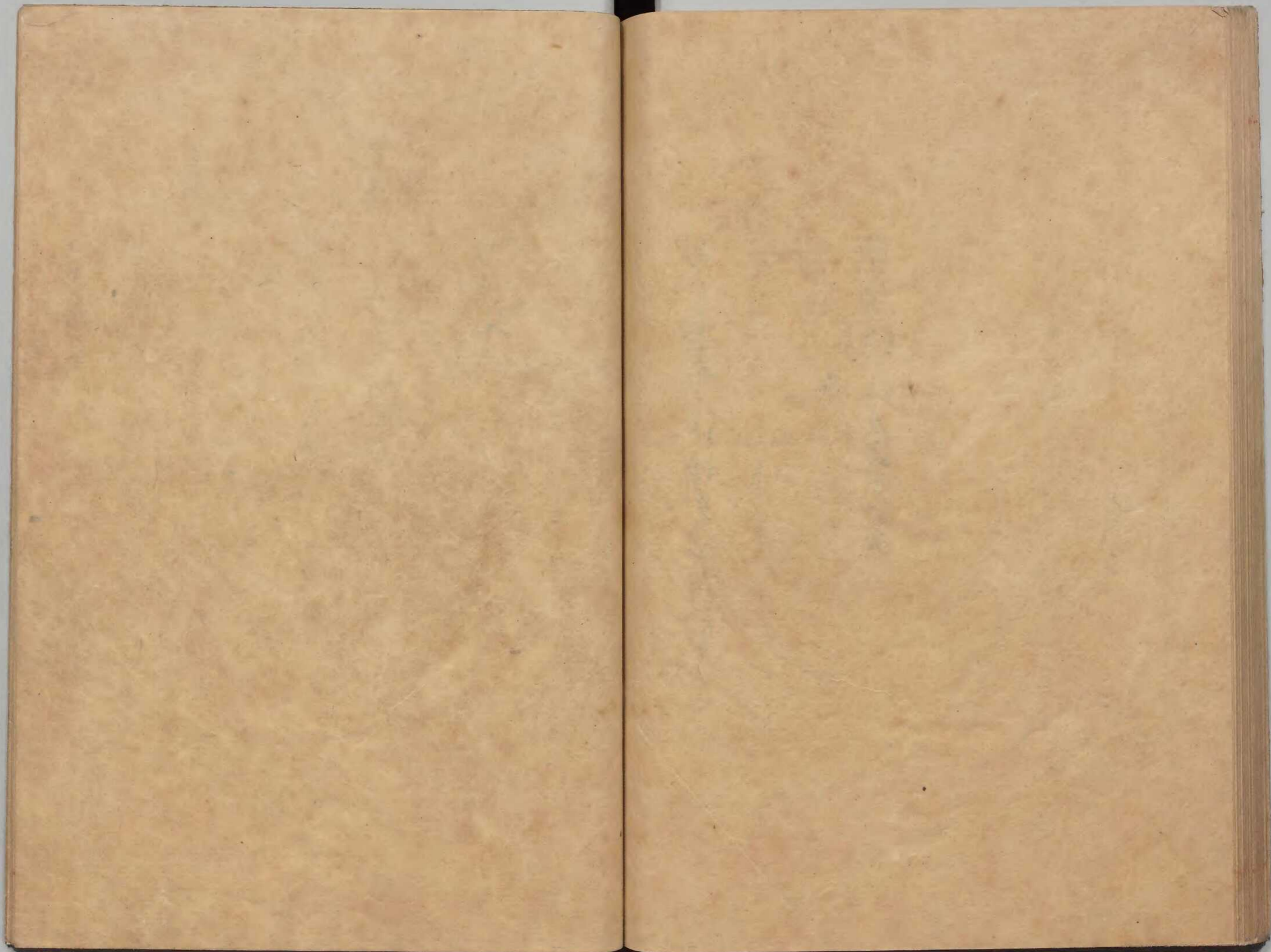
將軍殿より 錫封

同十五年より 西島と行

同十七年 清切米と行

家乃紋竹丸一文字







采山 さいしん

采 さい

古井次郎太夫 こゐり じろ たいふ

牛國之河 うしくにがわ

吉次 きち

采山の太夫 さいしん たいふ

牛國之河 うしくにがわ

古井次郎太夫 こゐり じろ たいふ 牛國之河 うしくにがわ



このう家督と継後よま井とありあ  
け山と称よ三列墨海よとひく  
大権現よつるふくまう

正信

九右衛門

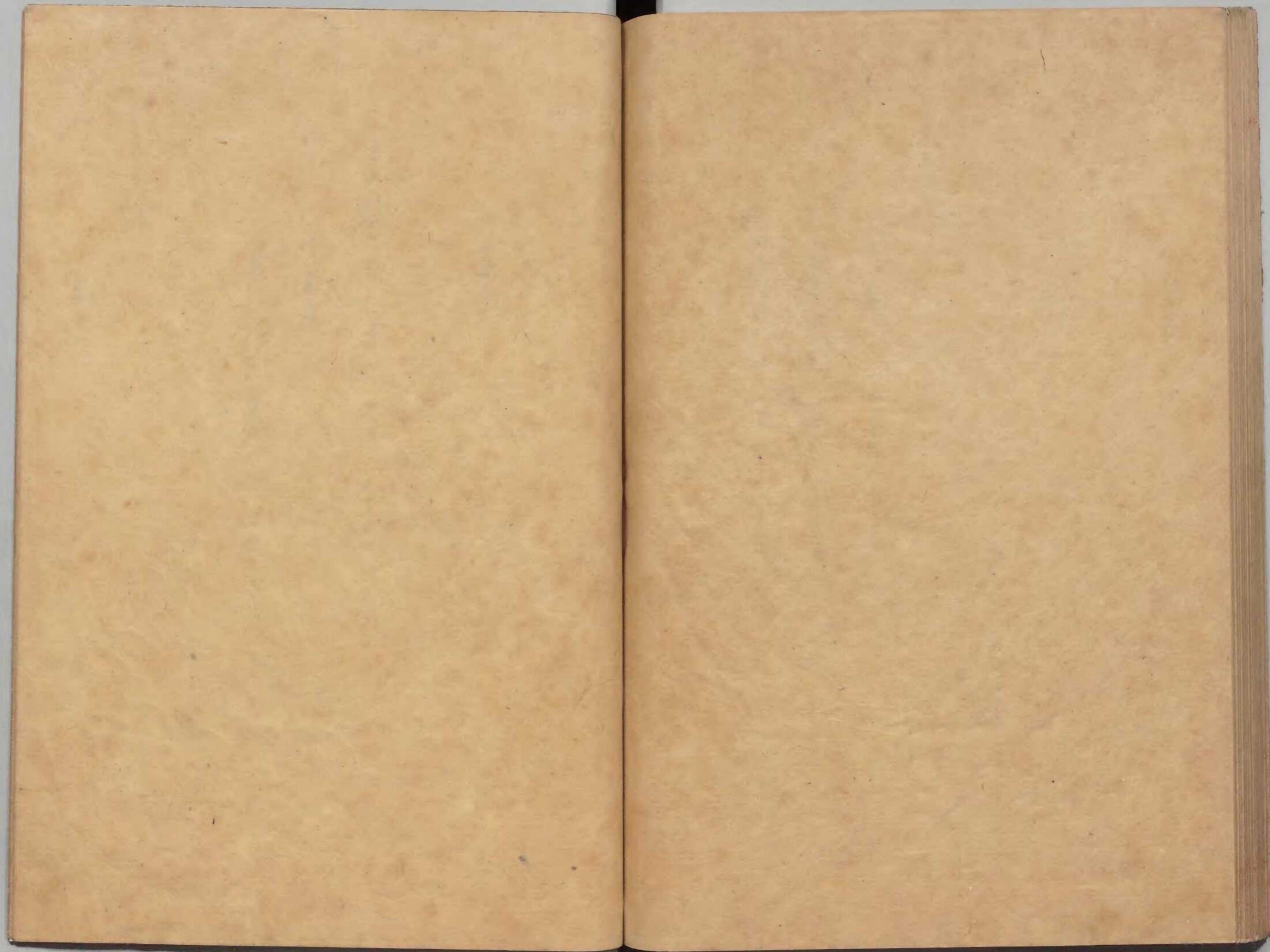
左衛門尉

右衛門尉とよ

將軍殿よはくまう

家の紋 丸の四三







正信

まこと

小長米

正親

まこと

小長米

宮は横地五右衛門子なり

芝山

まこと



家の紋  
扇



